

## 宝地房証真の禅観

愛知学院大学 大松久規

宝地房証真（生没年不詳）は、大蔵経を一六回も閲覧し、そのために源平の擾乱も知らずに過ごしたといわれる鎌倉初期の学僧である。拔群の学識を有していたとされ、従来の研究によれば、その著作は三七部に達するという。これらには真偽未詳のものも含まれるようであるが、代表的撰述としては「三大部私記」が挙げられる。すなわち、『法華玄義私記』『法華疏私記』『止観私記』の三種である。それぞれ、智顛（五三八―五九七）が講説した『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の所謂「天台三大部」、及びこの「天台三大部」の一一に湛然（七一―七八二）が記した註釈書に対して、さらに註解を施したものである。

ところで、叡山における中古天台の学風には文献主義と観心主義があり、とりわけ、院生時代中期以降には観心主義がその中心であったという。そうした中で、証真は厳密な文献主義の学風を堅持して多くの著作を残し、天台伝統の学問を守りぬこうとした人物であると評されている。そのためか、証真の著作の中で注目されるのは、どうしても教判や実相論、本覚思想などに関連した理論的側面が中心であり、観心などの実践的側面は見逃されがちである。しかしながら、「教観双美」とも「教観相依」ともいわれる天台教学の中にあつて、証真がその実践的側面を蔑ろにするはずはなく、むしろ、文献に基づいた観心の理解があつたと考えるべきである。つまり、文献主義と評される証真は、当然ながら自身の経験に基づき観心について述べることはないが、智顛や湛然の講説・著作に随つて、その実践的側面について彼なりの理解を示しているはずである。

そこで、本発表では、証真の「三大部私記」の中で最も実践的側面に関連するであろう『止観私記』を採り上げる。同書には、智顛の講説である『摩訶止観』及び湛然の註釈書である『止観輔行伝弘決』に対する証真の見解が記されている。もちろん、理論的側面に関連する記述も少なからず見られるが、そもそも『摩訶止観』が円頓止観を示すための講説であること考えると、証真の天台教学における実践的側面の理解を把握するには同書が最適であろう。

なお、本発表では、「仏教と日本―「日本」的な仏教の特性―」というテーマが与えられている。これまで発表者は中国天台学、特に智顛の禅観に関する研究を行ってきた。そのため、今回採り上げる証真の禅観に関しては、あくまでも『摩訶止観』や『止観輔行伝弘決』を中心とした中国天台学の観点から論究を行うことになる。文献主義と評される証真が、中国天台宗の事実上の開祖とされる智顛の禅観を如何に理解したのか、その特徴を探る手掛かりとしたい。

〈キーワード〉証真、智顛、三大部、止観私記、禅観